

ほんとうの自分

わたしは、幼い子どもであったとき、
幼い子どものように語り、
幼い子どものように考え、
幼い子どものように思いを巡らした。
だが、一人前の者になったとき、
幼い子どものことは止めにした。
われわれが今、見ているのは、
ぼんやりと鏡に映っているもの。
「その時」に見るのは、
顔と顔を合わせてのもの。
わたしが今、知っているのは一部分。
「その時」には、自分がすでに完全に知られているように、
わたしは完全に知るようになる。

ほんとうの自分

きょうも私は、いつものように教壇に立って、授業をはじめた。

都市部の女子校の進学クラスとはいえ、教室の空気が授業に飽きているなど見ると、私はいきなり吠え出したり歌い出したりすることがある。踊ったり、芝居もやる。「羅生門」授業の時は、老婆と下人のやりとりを一人芝居で演じた。双方になりきってその渡り合いをした。迫真場面に、生徒は引き込まれたり、退いたり……。ついには怪談話もし出す。教材の理解を深めるため、から始まって、要するにしばしば私の趣味の世界に入って行くのだ。

「さあ、きょうはテスト範囲の、大事なところのおさらいです。鈴木孝夫さんの文章が今回の中心ね。五十ページのところ、ちょっと読み返そう、はい、開いて。九行目からだよ。ポーツとしてる人だれだ？」

『：私たちはよく、他人から自分が正しく理解されていないという感じを持つことがある。本当の自分はこうなのに、人が分かってくれないと言って怒ったり嘆いたりすることはだれでもあることだ。』

「いいよね。こうだよね。どうしてみんな　アタシのこと分かってくれないの、と。十五歳のおなごの子のみなさーん、友だち同士で、また親や兄姉で一日何回もこのこと思ってませんか。でも、次だよね。」

『しかしよく考えてみると、自分と他人とは絶対に交換したり、変更したりすることのできない、立場の相違、視座の違いを持っているものだから、ある意味

では他人が自分を本当に理解できないのはあたりまえのことであって……。」
あつ、あの子はもう寝出したな。ほんと早い。たいしたものだ。神業だ。おれ
の声をすぐに子守唄にする。その後ろのあの子は、実に真剣な目つきをして、
：また目を開けたまま寝るにちがいない。——そう思いながら私は席に近づいて
ゆく。

「で、あるから、皆さん!!」

目を閉じかけた耳のそばで声を張り上げた。本人がハツとして私をにらんだ。
キョトンとしている。教室中一瞬の爆笑。

(しめた、集中チャンス!)

「本当の自分のことを、どんなに親しい友だちでもすべて理解するなんてあり
得ない。それは誤解にすぎない。あたしと○○ちゃんはなんでも分かりあえる本
当の親友なんだから……というのは、ウソ(強め)。そんなのない。」

キョトンとしているのもあり、じっと考えごとしながら聞いている顔もあり。
よし。反応よし。やや成功。

「こうゆうのはある、かもしれぬ。この世には、自分とすっかりおなじ人間
がもう一人どこかで生きている、という説がある。通常は、死ぬまで互いに出会
わないことになっている。出くわしたら、どちらかが死ぬから。しかしもしその
説のとおりなら、そのもう一人の自分こそ、自分のことをなんでも知っているだ
ろう。どうだね皆さん、会ってみたいかねえ……。」

そう言って、教室中をジーツとゆっくり見回す。教室の空気がシーンとしてや
や張りつめた。眠そうだった生徒が目を開けている。とはいっても、何人もの生
徒の目がニヤニヤ笑っている。その顔は『先生、また始まったな。』と言っている

る。

「でもねえ、皆さん。本当の自分で何だろう？鈴木孝夫さんは本文の結びのところで、『本当の自分とは、自分がこうだと考えている自分：』と言っていますが、本当にそれは『ほんとうの自分』でしょうか。ここで、こんなことを書いている人がいますから、紹介します。ちょっとだけ長いですが、よく聞いて下さい。」

『人生において我々は他人という鏡に自分のさまざまな顔をうつして歩く。A氏という鏡には私は好ましい男とうつり、B氏という鏡にはイヤな奴というイメージがうつるかもしれない。C氏には友人として：：。D氏には憎らしい男と：：。そしてこうしたさまざまな他人という鏡にうつった私のイメージの集大成が、この人生での私のイメージになるのである。だがそれは本当の私だろうか。本人にも本当に自分について知らぬ部分がある。他人という鏡にうつった自分は、本当の私ではないと誰もが叫びたくなるにちがいない。』

「さあ、どうですか。あなたの本当の自分は、他人の鏡にうつった自分ではないばかりか、自分でも分からない自分があるのだ、と言っています。今紹介したのは、遠藤周作という作家の短い随筆の書き出し部分です。」

ふっと見回す。二人寝かけている。前から三番目のこいつは、おれとの稽古の時は猿のようにピョンピョン飛び跳ね回り、竹刀を合わせていても、ふいにどこから飛びかかって来るか油断ならない。剣道するために生まれたような素晴らしい敏捷性。男のお友達も多い。授業では、みごとな陥没反応力。いるなと思っ

いても、気づくと教科書と顔がくっついていて。そのワザが、また早い。ゲンコツしても、へらへらした顔がかえってくる。でも、母思いだ。試合も強いが、赤点もとらない。

母一つで働いて子供を育て上げているのを知っているから、家では弟妹たちの面倒もみるという、信じられないが家では寡黙なお姉ちゃんだそうだ。

『ほんとうの自分』。この教材を、私は気に入っていた。思い入れの深い文章だった。生徒に授業し、その心の反応に迫りながら、問いかけは、必然として自分にも向いてきた。

：：：オレのほんとうの自分を、誰も知らない。三十年来の親友も。おそらくオレの妻も。オレすらも自分で知らないのかもしれない。ただ、誰にも理解されない、オレ自身の思っているオレが歯がゆくて、もどかしくてならない。

オレの、ほんとうの自分。

せんせいは優しい。せんせいは優しいから：：：。ことあるごとの周囲のことば。優しいから。だから何だ？だから、生徒にあまい。だから、指導がぬるい。同僚は、皆さんそう言いたいらしい。

「お父さんは優しいから」

妻の叱責はこたえたが、自分はアマアマでも何でもよいと思っていた。：

「お父さんは子どもの時甘えられなかったから、今お母さんに甘えてるんだね。」

息子がこう言ったと、妻から聞かされた時は、思わずことばを失った。

オレは、やさしいのではない。分からないのだ。教育も、家族も。教えることも、育てることも、分からないから、手探りでおこなっている。

ほんとうの自分は、ただの恐がりやなのかもしれない。では、何が怖いのか？

——それは、きつと壊れるのが恐いのだ。有形・無形に、崩壊への異常なほど恐
怖心を持っている。

幼い頃から家族が分からなかった。自分の家庭は、自分の小さい頃に壊れた。

六つのおときだった。怖かった。

梅雨時の遅い夕暮れに、風雨の強い中、母に手を引かれて、母の実家へ急いで
いた。

とその時、田んぼの畦道で母の足が突然立ち止まった。母はうっとりしながら
空を指さした。

「ほらっ」

かみなりさまのあかりの中に、雲の切れ目から、大きな御殿が見えた。

私は母にしがみついた。私は御殿よりも、母のとりつかれたような笑い顔が怖
かった。∴∴実家に着いてからも、母の笑い顔はなおらなかった。

母に狂気が入った。
怖かった。

当時小学2年生だった私は、学校から帰っての昼下がりに、縁側に寝転がって
猫のシロと戯れるのが日課だった。

「なすておめえしゃべんねえのよう」

私はシロを本気で怒りつけた。シロは耳をねかせて目を細めた。

そんな時、納屋から父の怒鳴る声がひびいてきた。

「この薬っこ風っこ強え日ぬ撒えでわがねえぞう」
母が何か言い返した。

数日後の晩。

「オカちゃんどごさ行つたあ、知やねえがあ」 夜九時過ぎ、父の声かうわず
った。

「いい、わらすはもう寝ろ」

祖母の蒲団の中でじっとした。窓の外で雨と風とが暴れ狂って、家中のガラス
戸が激しく騒いでいた。私は祖母にしがみついてトロツとしていた。

：母の名を呼ぶ叫び声。ぶるっとして跳ね上がった。すぐに走った。

「痛でえ痛でえ痛でえ痛でえ痛でえ痛でえ」

母が叫ぶ。

「どご痛でえ？どご痛でえってよう。」

父が怒鳴る。

「痛でえ痛でえ。足痛でえ手痛でえ頭痛でえみんな痛でえ」

泥でずぶ濡れの、顔しわくちゃにして、涙たらしてつばをぺっぺっして、じっ
としていない。病院に行つてからもそれは止まず、やっこのこと静かになったら、
母は動かなくなった。

サリンだダイオキシンだと騒がれるよっほど前からその十倍も毒性のあるPCP
を農家では普通に手で撒いていた。

母の死後、私はくり返し同じ夢を見るようになった。それは私の心身とともに成長していった。

東北地方の私の村に毎年吹く六月の冷たい風を、ヤマセと叫ぶ。

ヤマセ風がそりゃーと吹くと、私の前で、狂った母が舞い上がる。白い顔して、白い着物着て、くるくるくるくるまわり踊りながら、風に巻かれて上っていく。

私の中で時間が止まって、何かに住みついたようだった。それは、成長するにつれて母の夢とともに繰り返して出てきた。無限回数反芻され、増幅していった。私の中に凶暴な何ものが巣をくい、そいつが暴れ出すと狂ったようになって止まらなかつた。鎮まるまでおびえながら待つしかなかった。そいつが暴れ出すの怖かつた。

父にむき出しの反抗を繰り返した十代も、心の底ばかり覗き込んでいた二十歳の頃も、風に巻かれる母がついて歩いた。

愛情を手にとって語れない。壊れることに対する恐怖心だけが、私の中にゆっくりと擦り込まれていった。

父と同じ教師の道に入って三十数年間わたしは教壇に立ち続けた。自分の家族も持った。

しかし、自分の中にすみついた『六歳の自分』を私はいまだにもてあましてい

た。私の中で時間が止まったままになっていた。どう説明すればよいのかも分からない。

生徒たちは私に優しい。私が優しいのではない。家族は私を氣遣う。私は何もしていない。私は幸せだったと思う。

愛情が本当には分からない不安。家族の愛情を本当には知らないという不安。愛情をどう語ればよいのか分からないという不安。

優しいのではない。教えることも、育てることも、分からないから手探りでやって来たのだ。

∴私が時々ボーッと考えごとをしていると、生徒たちはすぐにそれを察知して、隣同士でヒソヒソ話が始まっていた。

「こらーッ。」

と言うと、キョトンとして振り返る。こっちを見てニヤツと笑った後ろから二番目の生徒は、最近両親の仲が危なくてイライラしたり落ち込んでいたりすることが多い。隣でヘラヘラベチャクチャとしている生徒は、毎日カップ麺ばかり食べている。ミーハーの母親と、会うといつも酒臭い父親がいる。同じ列の一番前の席は、もう一週間空いたままだ。生真面目な子で、作文コンクールに入賞したこともある。とてもきれいな文章を書く。その心のままだ。夏休み明けの報告文に、「久しぶりに別れた父と会って家族の絆を感じて来た」と、あった。この子の文章はいつも素直すぎてかえって不安になる。

オッ、後ろの座席のチビがまだ起きています∴∴。あの子は入学してすぐ、真っ

先に私にくつついてきた。廊下を歩いてみると、待ち構えていて、ニイーツとおどけた顔をのぞかせて迫って来た。私もやり返した。この子はいつもニコニコしているが、家では暴力的な義父におびえながら暮らしているのを聞いて知っていた。神様は時として、天使のような子をそのような境遇に置かれる。時折しおたれて、ポーツと下を向いている日があると、私からおどけを仕掛けた。

廊下側最前列でいつも熱心にノートを作っている生徒は、入学前の中学3年間まるつきり学校へ行かなかった。目のきれいな子だ。そのはす向かいの生徒は、障害を持つ兄を差別する社会に対する怒りを切々と作文に書いた。市のコンクールで優秀賞をとった。宝石の心をもった妹である。

この生徒たちの多くは、作文させると、人にとって最も必要なもの、自然から授かったものを表出させてくれる。十五歳のこの子たちはこんなにもやさしい。自分のかかえるそれぞれの人生から、逃げずに生きている。壊れぬように、壊さぬように、懸命に持ち堪えている。それを思うと、涙がこぼれる。いとしいと思う。

私に何ができるか。目の前のこの子たちに、幸せになってほしい、と願う。私が幸せにできるのではない。それはこの子たち自身の手ですることである。オレはその素地づくりの助け手かな、などと生徒たちの顔をながめながら思う。

私の「ほんとうの自分」。消しがたい心の闇をもつ自分。しかし、それが自分のすべてと思わない。そのことが三十年間教壇に立ち続けて、辿り着いた結論だった。

「だから皆さん、本当の自分、本当の私は、実は本人にも誰にも分からないのかも知れない。でも、よくなりたい、幸せになりたい、と願う自分でいつもあ

り
た
い
で
す
ね。
」